作　　文

小学校　最優秀賞

「みんなに愛されるねこ」

綿内小学校　五年　　西澤　ことは　さん

朝起きるとお外に行ってしまうねこの『わかめ』毎朝ニャーと鳴いて出してもらいます。わかめは、外に出ると空気をすって外でトイレをします。時間がたてば正満寺やとなりの家で草を食べたりしています。そんなわかめを見て、私は「気をつけてね」「友達たくさんつくってきてね」という気持ちをこめて、『いってらっしゃい』と一声かけます。

ある日わかめが人のおうちで他のねことねているところを見つけました。「わかめ」とよぶと、こちらをじっと見つめてでも、こっちには来てくれません。わかめは、元々野らねこなので私達が出かけるとわかめも出かけます。でもわかめはきちんと家に帰ってくるので安心して外に出すことができます。

外にいるわかめは野らねこにもどったみたいに近づくとにげるし、他のねことケンカもします。時々ねていると知らない白いねこが家の庭でゴロゴロねっころがっています。それを見てわかめは大きな声で、いかくしながら、毛をさかだてて、おいはらっています。「野らねこ」と「家ねこ」二つの顔を持つわかめなのです。

私の家には昔からいろんなねこが来ていました。その１ぴきがわかめです。昔は、かくれたりしてよってきてくれませんでした。ご飯をあげるのもひと苦労。毛なみがボサボサで右足がケガをしていたので、保護し、病院に行き、「１０５日間」入院し、家ねこになりま

した。家ねこになったわかめは、３kgも増えました。毛なみもキレイになりました。ご飯もあげる前からすりよってきて、目の前で食べてくれます。最近は、カナヘビ、ネズミ、スズメをとってきて見せてくれました。そんなわかめの誕生日、１年記念、お正月、にはごうかな食べ物、ケーキを用意して家族みんなで祝いました。

私は、わかめが長生きし、幸せになってほしいので毎日こう思っています。『わかめの人生だから、わかめの好きなように生きていいよ。何かあったら私達ができることはするからね。わかめは、家族の一員だから大切したいよ。これからもずっと一生。』

中学校　最優秀賞

「家族の大切さ」

犀陵中学校　二年　堀川　亜花里　さん

当たり前かもしれないけれど、自分の家族はこの世界で唯一のものだと思う。勿論両親がいなければ私達は生まれてくる事さえできなくて、それは両親も同じ。血の繋がりを持っている唯一無二の存在だから大切にしていきたい。両親に限らず周りの人にも同じことは言える。感謝を忘れずに。

中学に入り少しした頃、思春期というのもあってか親に不満ばかりを抱いていた。「何も知らないくせに」「めんどくさ」こんな心無い言葉をつぶやいたり、態度が悪くなったり、酷いときは、「家族なんていらなかった」こんなことを思ってしまっていた。強がりや嘘で言っていたのではない、すべて本気で思っていたこと。

そんなふうに思いながら月日が経ち、妹の手術の日が迫っていた。私の妹は生まれつき扁桃腺が人より大きく、喉の半分を占めるほど。

寝ているときの呼吸や扁桃腺からくる熱などのときはいつも苦しそうにしていた。そこで扁桃腺を剥がす手術を行うことにした。手術をするということは入院はつきもので、妹は入院し母は入院の付き添いとして家を離れることになった。いつも家事を全てやってくれている母が家を離れたことで実感したことがいくつかある。

一つ目は家事を自分がやることの大変さ。勿論私一人で全てをやるのは無理なことだった。お母さんはそれをわかっていたのか、事前におばあちゃんを呼んでくれていた。本当に用意周到だなとつくづく思う。おばあちゃんも常に暇という訳ではないから私が帰宅する頃に家に来て私がご飯を食べ、お風呂に入ったらおばあちゃんは帰る。そんな日々を二週間続けた。私ができる必要最低限の家事は毎日こなした。今までやったことのない家事をやるのはいい経験になったと思う。初めてな事もあって、手こずることの方が多かったけどこれをお母さんは毎日やっているんだ。そう思えばなんら苦はなかった。そこで私はお母さんの凄さに気づいた。

二つ目は、普段当たり前にあるものがなくなると喪失感に襲われること。なに当たり前のことを言っているんだろう、そう思われるのかもしれない。私はこれをお母さんで実感した。普段はガミガミガミガミ言ってきてうざったいなと思っていたけど、いざ本人がいなくなって何も言われないとなぜだか少し寂しさを覚えた。「家族なんか」と思っていた私が思い直したきっかけでもある。改めて自分にとって母親という存在が大きかったのかよくわかった。「当たり前」だと思っていたものもいつ失うかわからない。なくなるときは一瞬だ。だから私は日々感謝の気持ちを忘れず過ごしていきたいと思う。

入院生活が終わり妹が退院したときのこと。久しぶりに会ったお

母さんと妹。その姿を見たとき、安心と言うべきか胸の内が暖かくなる、そんな感じがした。さすがに泣くとまではいかないけれど、それに近い状態にはなった。自覚がないだけで、家族のことが「大好き」だったんだなと思う。「嫌い」だとか「めんどくさい」だとか、表面ではそんなこと思ったり言ったりしていても、心の奥底ではそんなこと思ってないんだな、と実感した。

これら全て、大したことではないかもしれないけど、それでも私は痛感した。家族は自分が思っているよりも凄くて、自分では自覚していなくとも物凄く必要で。勿論家族には替えが効かない。唯一無二の家族。友達のように簡単に縁の切れない関係。深い絆がなくともももっと深いところで私達は繋がっている、少なくとも私はそう思う。これからきっと数え切れない程の人と関わっていくことになるだろう、これは私に限らず。たとえその数えきれない程の人の中で、トラブルやハプニングがあったとしても、自分の家族がそばにいることを忘れないでいたい。家族に対して嫌なことが一つもないと言ったら嘘になるけれど、私は家族を信じ、愛して、心の底から大切にしていけたらいいなと思う。今日も私を生んでくれた両親に感謝を。日々私を支えてくれる人たちにも感謝を。